

## 第50回 スイス史研究会報告要旨

## 十九世紀の日本とスイスにおける進化論の受容について

” Zur Rezeption der Evolutionslehre in der Schweiz und in Japan im 19. Jahrhundert”

ハインリヒ・ラインフリート (チューリヒ大学東アジア科)

Dr. Heinrich Reinfried

日時：2005年9月17日(土) 14時  
～

場所：日本女子大学「百年館」3階 302会議室

1873年の岩倉具視使節団の記録である久米邦武の「米欧回覧実記」では、スイスの宗教および宗派思想について、スイスのエリートと大衆の双方において同様に重要な地位を占めていたと明記されている。それとは対照的に、当時日本を訪れた西洋人たちの一致した意見では、日本では、宗教を尊守するのは教養のない庶民に限られ、エリートは物質主義的思想を信奉していた。これは、有機・無機的世界の解釈としてのダーウィンの進化論をはじめとする発展思想に対する抵抗感が、日本ではスイスよりも弱かったということの意味するだろうか。

より詳しく検討すると、必ずしもそうではないことが明らかになる。スイスでは、ダーウィンの自然選択説の天地創造説との矛盾は、世界観への影響をめぐる政界や学会のエリートによる激しい論争を生み出した。一方、日本では、進化論という思想がエリートによって反対されなかつただけでなく、むしろソーシャル・ダーウィニズムの形で列強との競争におかれた日本の経済発展の予言ととらえられて、熱烈に歓迎された。スイスのエリートは進化論と天地創造説を日常生活で等価に両立させることにより「世俗内分離」を試み、これに対して日本のエリートは、進化論説を自分の世界観の礎石として受け入れた。しかしそれにもかかわらず、スイス・日本の両国で、進化論の受け容れによって、近代化と、政教分離あるいは近代国家形成に不可欠な前提条件との衝突が起こるといった結果が生じた。民主主義的連邦国家であるスイスのエリートも、また1889年の欽定憲法の下で単一国家である大日本帝国のエリートも、共に、進化論についての知識を庶民になるべく普及させないことという点で一致していたのである。したがって、両国での小学校では、大自然・人間の歴史の起源についての解説は、依然として神話の形で続けられた。